

故日高正好先生追悼号に寄せて

経済学部長 杉野 罔 明

日高正好先生は、1997年5月14日、薬石の効なく、彼岸のかなたへと旅立たれました。

立命館大学経済学部は、日高先生を追悼するため『立命館経済学』の特集号を編纂し、ここに謹んでご霊前に捧げ、ご冥福を祈ります。

日高先生は、1941年にお生まれになり、1965年に立命館大学文学部をご卒業後、大学院文学研究科英文学専攻へ進まれました。大学院を終了後は立命館高等学校に勤務されましたが、1970年の4月に立命館大学経済学部の助教授として赴任されました。その年に同じ新任者として赴任した私にとって、日高先生はいわば同期の桜でありました。先生もまた、私のことを同期の桜として、特別の親しみを懐いておりました。

先生は経済学部にあつては、1979年度の学生主事をはじめ、外国語科連絡協議会の委員や大学協議員などの責務を果たされ、1984年4月に教授となされました。

日高先生のご専門は、言うまでもなく英文学であり、日本アメリカ文学会、日本英文学会に所属していました。先生は、とりわけ社会派といわれるドライサーに惹かれており、「社会の中の個人」、あるいは人間疎外といった問題に深い関心を寄せておりました。またアメリカ社会を鋭い目で分析し、その冷たい現実がもっている諸矛盾を客観的に把握しながらも、そこに生活する諸々の人に対して温かく見守るという人道的な立場をもっておりました。「シスター・キャリー」、「キャリーからジェニーへの発展」、「ドライサー試論」、「ジェニー・ガーハート論」といった優れた論文は、先生の温かい心情を前提として出来上がったものです。

先生はまた詩人でもありました。『アメリカ詩集』、『私記三好達治』、『おやじの眼鏡』などの詩集や論考は、先生のほのぼのとした温かい心を感じさせる語句が紙面のあちこちの溢れ、読む人をほろりとさせるものがありました。

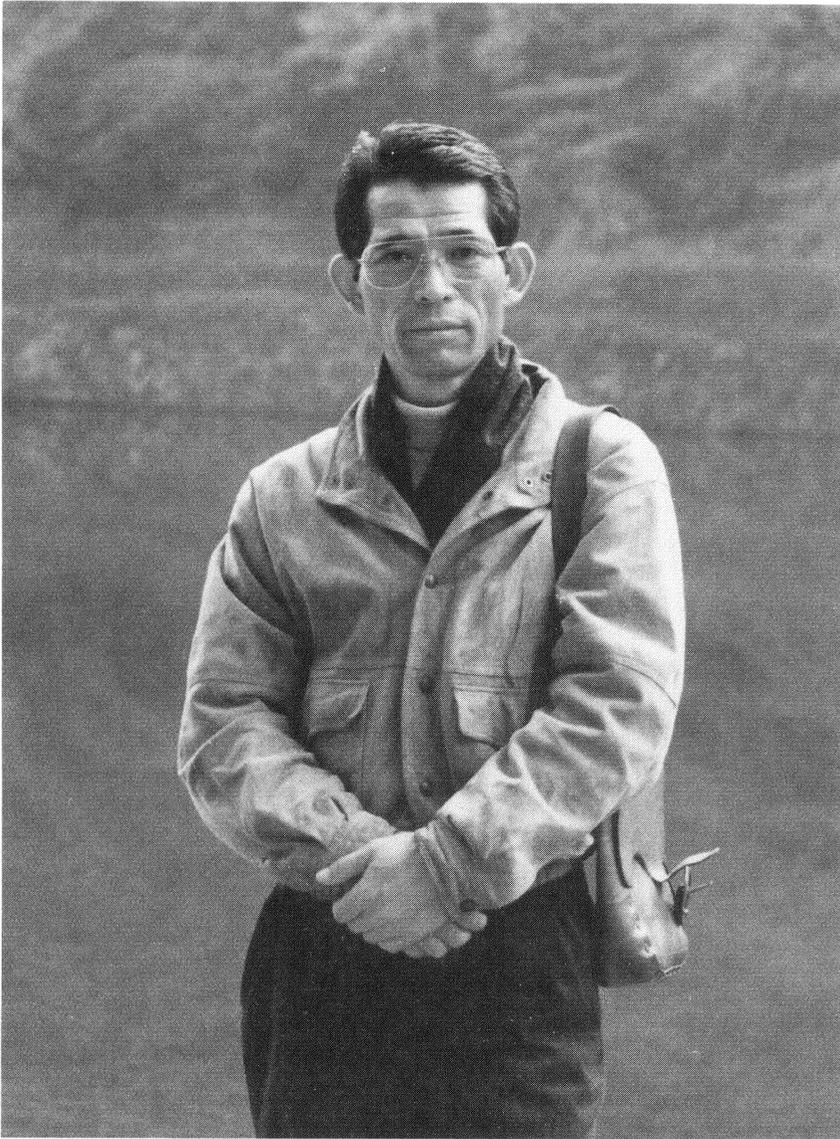
そのような先生は、学生の指導に当たっても、懇切丁寧であり、とくに学生とのコンパなどには、喜んで出席されたものです。奇しくも、赴任して早々の年、一回生の担当は同じクラスでした。先生は学生から絶大な信頼と親しみをもたれておりました。コンパに二人で参加したときなども、今となっては楽しかった思い出の一つであります。

いつも明るい笑顔で、「スギちゃん、身体を大事にせんといかんぜ」と忠告してくれた先生が、私よりも先に旅立たれ、冥界を異にすることになるとは、とても想像できなかったことでした。

これほど貴重な先生を喪ったことは、立命館にとって、また経済学部にとって言葉に尽くせない大きい痛手です。私たちは、先生のご生前の業績を讃えると同時に先生が残された業績やご遺志を受け継ぎ、さらに発展させていく固い決意をもっています。

日高先生、どうか安らかにお眠り下さい。

1997年12月24日



故日高正好教授 遺影

(1989年に撮影)